国語教育における合成AI活用の危険性と課題

東京大　酒井 邦嘉

学校教育、特に国語教育におけるAIの危険性について論じる。文部科学省初等中等教育局は、二〇二三年七月四日に「暫定的なガイドライン」を示した。中でも「活用が考えられる例」の是非は最重要である（『指導と評価』第七〇巻一月号一八―二〇参照）。本講演では言語脳科学の視点から、そうした合成AIの活用が学校教育に深刻な問題と障害を新たに引き起こし、全教科において言語力や思考力・創造力の低下につながることを明らかにした。

二〇二三年になって「生成AI」が一般に注目されるようになったが、この技術は人間の言語や思考などの能力と比較にならないほど未熟であり、データベース上の語彙を合成して文章を作るだけだから、「合成AI」と呼ぶべきである。

AIを誤って使えば、教育環境を根本から覆す可能性があり、従来のデジタル技術とは桁違いの危険性をはらむ。十分な思考力が身に付けばデジタル機器を賢く使いこなせるかもしれないが、その逆は成り立たない。子どものうちからデジタル機器を使うことで、言語力や思考力・創造力の健全な成長が阻害され、安易な手段に頼る傾向が助長されるからだ。

Chat GPTのように対話を模したものも、話者の意図や意味、文脈の理解はもちろん、論理の解析すら搭載されていないから、あくまで「対話風」なのだ。

生成AIは、このようにして正当な指導を阻害するだけではない。二〇二三年を境に、教育現場において生徒の学習活動に対する正当な評価も難しくなってしまった。

電子機器の使用を禁じて文章を書かせたり、口頭試問を尽くしたりしない限り、もはや作文という成果物からは、合成AIの使用を見抜くのは困難だ。

合成AIを使えば、自分が生成していないものを自らの文章に取り込むことに対して、抵抗感が減る。そうした行為は剽窃を助長し、倫理性を貶めることにつながる。ケンブリッジ大学が早々に「作品での生成AIの利用は剽窃と見なす」と断じたのは卓見であった。

「合成AIありき」の風潮にあって、教育では何を最優先にすべきかという判断が揺らいではならない。育てるべきは生徒の全人的な健全性であり、守るべきは精神的な成長ではないだろうか。そこに国語教育や読書の占める位置は極めて大きいのである。